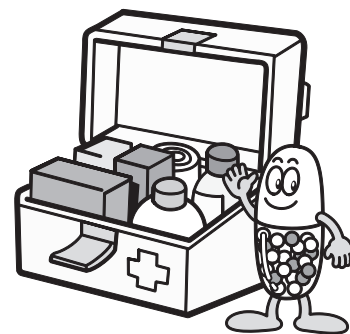


く す り ば こ



かんいけんだくほう 64. 簡易懸濁法

簡易懸濁法という言葉自体初めて耳にされる方も多いと思いますが、食べ物を飲み込むことが困難で通常の口からの食事摂取ではなく、胃に管を通して直接栄養を摂取（経管栄養）している患者様などに錠剤やカプセル剤を投与方法の一つです。

以前は予め錠剤を粉砕したり、カプセルを開封して中身を取り出して粉状にしたものを水に溶いて投与方法が行われてきました。この方法ですと、

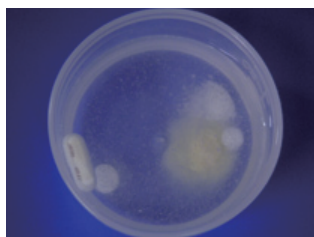
- ・粉砕する器具や分包紙に薬剤が付着してしまい投与量が減ってしまう。
- ・粉砕の際に生じる温度や物理的な力などが成分に影響する。
- ・粉砕された薬剤どうしが混合されることにより配合変化が起こり、薬効に影響する。
- ・本来は錠剤やカプセル剤で投与されることが前提の製品なので、粉砕やカプセル開封により体内での吸収などに影響する。また刺激感なども生じる。
- ・介護する人が投与する際に粉状の薬品を吸いこんでしまう。

などの可能性があるため事前に対応を考えなければなりません。

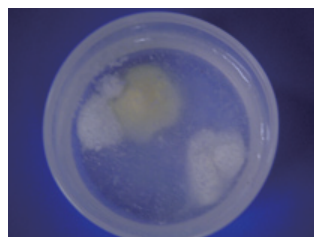
そこで考案されたのが簡易懸濁法です。これは1回に服用する錠剤やカプセル剤をまとめて約55度の温湯に入れて10分間放置し、崩壊・懸濁させてから投与方法です。簡易懸濁法ですと、口からの薬剤摂取に近い投与方法なので、上記の錠剤粉砕やカプセル開封により生じる問題も避けることができます。



簡易懸濁前



約55℃の温湯で懸濁した直後。カプセルは開封せずそのまま懸濁します。錠剤の一部は崩壊しはじめています。



懸濁されて投与できる状態です。



最近発売された簡易懸濁法用の器具。注ぎ口と経管栄養チューブの接続が出来るように工夫されています。

ここで示した約55度は、温湯を10分間放置することにより約36度のいわゆる人肌になることで設定された温度です。ピッタリ55度の必要はありません。この温湯を作る方法としては、

●病棟では蛇口で出る一番高い温度の温湯が通常55度位である。

●ご家庭では

- ・ポットのお湯と水道水を約2:1で混ぜる。
 - ・赤ちゃんのミルクを作る調乳ポットを利用する。
- などの方法があります。

簡易懸濁法は崩壊・懸濁されているので、錠剤を粉砕したりカプセルを開封したりしてから水に溶く方法よりも経管栄養の管が詰まる可能性が減り、また投与直前まで錠剤やカプセルの識別が可能となり、投与量の増減も容易に行うことができます。また、簡易懸濁法を当初研究した施設のデータでは、錠剤のうちで70%以上が簡易懸濁法で投与でき、粉砕で投与できる約60%より多いことが分かっています。

簡易懸濁法は2001年に考案され歴史は10年ほどですが、なによりも本来投与される状態に近い形で投与できるというメリットがあり、取り入れる施設が増えています。また簡易懸濁法が行いやすいように開発された器具も次々に出てきています。

今後、薬剤部では患者様にとって有効性があり、医療者側にも利便性や安全性の高い簡易懸濁法をより良い方法で導入できるよう検討していきたいと考えています。

また調剤薬局でも簡易懸濁法を導入している薬局がありますので、薬剤部窓口でお尋ね下さい。

(薬剤師 相澤 学)



ホームページではカラーでご覧いただけます <http://www.kanto-ctr-hsp.com/>